

翼思想一色に塗りつぶされたと言ってもよい。しかもこれらの事実は、上の二つの年代を研究する者にとって、考慮に入れておかねばならない事柄なのである。もちろんこの間には、1929年という、John Steinbeck の言葉を借りるならば、「ensuing ten years に、contrast and tragic stature をあたえた」年があることを忘れてはならない。実際ある人びとにとっては、1930年代は、“a time to remember” のようで、この時代に関する資料、または資料集を多く眼にすることができる。たとえば、F. L. Allen の *Since Yesterday*, Don Congdon 編著、*The '30s: a time to remember* などはその一例である。しかしながらこれらの「資料」は、程度の差はあるが、いわば外からの記録であって、その時代における、個人の内面に根差した記録ではない。そのいみで、本書は実際に30年代に生き、アメリカ内外の情勢の変化をつぶさに観た一個の人間の歴史として、この時代を知る上に好個の資料となるであろうとの期待を抱かせる。ただ、本書の記述は1934年から始まっているので、1930年代全体をカバーしていない点が少々惜しい気がする。

本書の著者 Alfred Kazin は New York 生まれの文芸批評家・歴史家である。主著は *On Native Grounds* で、その精緻な研究と鋭い批評眼によって、現代アメリカ文学研究者の必読文献の一つになっている。彼はいくつかの新聞社の文芸担当記者として活躍することになるのであるが、そのころ書いたものを主にして集めたものが、*Contemporaries* として最近出版された。その他、小説もかいており (*A Walker in the City*)、編者としてもすぐれた腕を持っていて、William Blake, F. Scott. Fitzgerald, Theodore Dreiser, Herman Melville などに関する卓れた仕事を残している。彼が本書で扱おうとする30年代は、彼の文筆活動の、いわば駈出し時代

Alfred Kazin :
*Starting Out in the
 Thirties*

平野 信行

20世紀も半ばを過ぎた今、その歴史を振り返ってみる時、1920年代あるいは1930年代ほど興味をひく時代はないであろう。前者においては、いわゆる the lost generation が生まれたし、後者には、ほとんど左

であって、批評家 Alfred Kazin の名はまだ確立していないが、感受性豊かな青年時代を送った、ふたたび Steinbeck の言葉を借りるならば、I can't think of any decade in history when so much happened in so many directions という 1930 年代を、はたしてどのような眼でとらえているか、興味をひかれるところである。

本書は、全体で七章から成り、最後の章は epilogue と題されて、1945 年という年があたえられている。これに倣って、第一章以下、年代が章の題名になっている。これをみると、次のような疑問を出したくなる。すなわち、1934 年なり、1935 年なり、年代をあたえることによって、著者は 1934 年あるいは 1935 年を描こうとしたのであるか、これは一種の自伝であるから、その年代における主として人間を描こうとしたのか、あるいは両方なのかということである。この種の書物について理想的なのは、人間もよく描かれており、しかもその時代の特質も生き生きと把握されていることであろうが、なかなかそうはうまくいかない。その点本書はどうであろうか。以下、章を追ってみたいことにしよう。

第一章は 1934 年であり、彼が college of the City of New York を卒業する前年である。1934 年といえば、Hitler が総統に就任した年であり、これを機に、ヨーロッパの危機は、ますます深刻の度を加えて行く。一方、アメリカ国内においては、the Great Depression 回復策としての New Deal 政策が行なわれつつあった。このような時期に学生生活を終えて実社会に出るということは、自らあるハンディキャップを負わされて出発することである。そうしてみると、冒頭に One hot June afternoon in 1934, deep in the depression, I had just completed my college course for the year and was desolately on my way home to Brooklyn……

と書いた気持も理解できるのではなかろうか。文章の前後関係からは、depression なり、desolately という語は、I had no job and simply no idea what to do with myself (p. 6) という状況から生まれたものであろう。が同時に、それは時代の雰囲気伝えるものと言ってよいのではないか、少なくとも 1934 年の章に限ってみると、depression という語が数回用いられており、その中には、the Great Depression を指すものもあることは、それを裏づけるものといえそうである。この章で注目されるのは、彼が自らを socialist と言っていることである。彼の言をきいてみよう。

Although I was a "Socialist", like everyone else I knew, I thought of socialism as orthodox Christian might think of the Second Coming—a wholly supernatural event which one might await with perfect faith, but which has no immediate relevance to my life.
(pp. 3-4)

I was a Socialist as so many Americans were "christians". (p. 4)

本書では、何度となく socialist あるいは socialism という語にでくわすのであるが、上に引用したところは、著者の観点が最もよくあらわれているところである。彼は socialist であることをけっして特別視していない。多くのアメリカ人が「クリスチャン」であるように、socialist であるという。しかも彼の言う socialist は、“Socialist” であることに注意せねばならない。そこには、socialism をイデオロギーとして信奉する socialist、いわば specialist としての socialist に対するアンティテーゼが示されているとみてよいのではなかろうか。彼の socialism 観について

もう一つの特徴は、背後に communism を置いていることである。観念としての Communism には反対を唱えない彼も、大学を卒業後マルキストになることが、個人の名誉と考えているような middle class and doctrinaire radicals に対しては、the deepest contempt を覚えたという (p. 4)。要するに、彼は not worshipful of ideotogists, yet believed in socialism (p. 6) なのである。それならば、著者の観方には socialism の色眼鏡がかかっているかといえば、そうでもない。時には、それらしい観方もあるが、だいたいにおいて公平である。その点、Michael Gold に代表される New Masses 派などとは異なる。ただし、公平であることは、彼の長所でもあるが、また短所ともなっていることをつけ加えておかねばならない。

“Socialist” として実生活に入った著者は、ジャーナリズムの世界に入るのだが、そのきっかけをあたえたのは *Times* にのった John Chamberlain の review であった。彼は老朽化した「タイムズ」に文芸欄を創った人である。それを読んだ時

On a sudden impulse I got off at Times Square and made my way up to the Times—and to my utter astonishment found Chamberlain in and perfectly willing to hear me out. (p. 7)

血気旺んというか、勇ましいことをやったものである。しかし上の決心が、ジャーナリスト Alfred Kazin を、ひいては文芸批評家 Alfred Kazin を作りあげることになるのだから、この出会いは重要である。おそらく彼からみれば、青二才にすぎなかったであろう、著者の Henry Vaughan や John Donne についての college essays を読んで、Chamberlain は “here’s an intelligent radical” なる recommendation をつけて

The New Republic に紹介してくれた。ここで彼は、最も大きな響影をうけた三人 (John Chamberlain, Malcolm Cowley, Otis Ferguson) の一人、Malcolm Cowley に会う。Cowley については、Van Wyck Brooks の *Days of the Phoenix: the nineteen-twenties I remember* にも描かれているので、併せ読むと面白いであろう。この章の後半は、もっぱら Cowley の人、彼の立場などについて著者の考えが述べられており、批評家 Kazin の特色がよくあらわれている。

第二章は 1935 年である。最初、Cowley の assistant である Otis Ferguson について語られる。彼を登場させたのは、Cowley との対照であろうか。

Ferguson was one of the real roughs of the Thirties—not because he had been a sailor, but because he feared and despised high culture. (p. 30)

Ferguson は相当変り者だったらしいが、著者はその彼に好意を持っている。彼は 1920 年代の作家や批評家に反撥を感じており、Van Doren, Canby, Benét, Christopher Morley らは gallery of the Twenties to shoot at (p. 49) と、まるで十把一からげの扱いである。この章で注目されるのは、本書ではじめて family story ともいうべき事柄が書かれていることである。この記述が約 10 頁に亙っていることからして、読者は彼がいかに重視しているかが推し量られよう。彼が書いているのは、従姉の Sophie についてである。彼女は、著者といっしょに暮しているのであるが、未婚で、そのことが家族の心配の種になっている。だが著者個人にとっては、Sophie は単なる従姉以上の存在であって、彼の言葉を借りるなら、“my other mother” といってもよいくらいであった。著者は彼女に秘かな思慕の念を抱いていたのであろうか、

彼女を描く筆は情熱的であり、時にはエロティックでさえある。どこか D. H. Lawrence の小説の一部を思わせる筆致である。その後、ふたたび文学批評に筆を戻し、James T. Farrell の *Studs Lonigan* 三部作についてのべられる。この作品の第三部 *The Judgment Day* の出たのが 1935 年であるから、彼はちょうどこの年に全部を読むことができたわけである。彼は一読して驚嘆した。自らが育った culture をかくも露骨に拒否したものはみたことがないと言っている。しかし、この作品がすぐれたものであることを認めるに吝かではない (cf. p. 54)。ついで William Saroyan について述べられる。彼に対する sympathy は、Farrell に対するほど深くはないが、それでも、彼がすぐれた作家であることを、熱っばい調子で語っている。

次の章は 1936 年である。まず異色の左翼批評家 V. F. Calverton について語る。著者の言うところによると、Calverton は若くしてすでに revolutionary であり、an intellectual sympathizer with the Communists in the early Twenties (p. 65) であったという。われわれにはマルクス主義の立場からみたアメリカ文学史 *The Liberation of American Literature* (1932) その他で知られている。またこの章では、Nora という女性について語られている。彼女は、著者とは高校での知りあいであり、tomboy あるいは class rebel であったという。彼女は、彼に *A Farewell to Arms* とか *Point Counter Point* といった「危険な本」を教えてくれた。二人は親しくなり (on love-making terms with) 結婚しようとするが、当時はまだ another unemployed college graduate (p. 78) であったからそれはできなかった。そのうちに、まわりが次々に結婚するので、Nora は次第にあせってくる。述べられていることを要約すれば以上ようになる。第二章の Sophie

の場合とちがって、彼の sympathy がそれほど感じられないのは、Nora と Sophie の彼に対する関係を考えれば当然のことかもしれないが、少々意外な気がしないでもない。Sophie の記述を小説というなら、Nora のそれは新聞記事である。

続いては、あの *Waiting for Lefty* で有名な Clifford Odets について述べられている。彼の Odets 好きは熱狂的である。曰く、

How I admired Odets! How grateful I was to Odets! Even his agit-prop play *Waiting for Lefty* bounded and sang, was crazily right in its close-ups, abruptly sent out such waves of feeling that I found myself breathing to Odets' rhythms (p. 81)

と、感嘆符つきで、次には Hurrah! Odets といいたいのではないかと思われるくらいである。実際著者の Odets 好きは相当なものであったらしく、本書の扉に *Awake and Sing* からの引用がみられるほどである。

第四章は 1937 年であるが、この章は、スペイン内乱についての記述と、前に述べた Sophie が長い unmarried の状態をすてて結婚するが、すてられるという悲劇についての記述をのぞいては、これといって特筆すべきことはない。このころ、前章に登場した Nora があらわれて、彼に結婚することを expect するが、彼の方ではその気にならなかったということが述べられている。

次の章は 1938 年、1939 年である。この年は、著者にとっておそらく忘れることのできない年であろう。なぜなら、この年に結婚するからである。相手の女性はロシア系で「戦争と平和」のヒロインにあやかり Natasha という。二人は行きずりの知りあいにすぎなかったが、

From the moment I met Natasha, I

was enraptured with all the cultural goods that came along with her—the Russian face, the Russian name, the Russian blouse, the Russian woman and the Russian devotion to causes.

(p. 132)

という具合で、たいへんなロシア好きであるが、the Russian devotion to causes などといわれると、あれほど革命を非難したのに (cf. 第三章) たいした変わりようだと思わざるをえない。惚れてしまえば何とやらというところだろうか。本章の後の方で、ますます激しさを加えて行くナチズム、ファシズムの勢いについて述べてあり、the approaching storm was to hit some people more than others (p. 146) と締めくくっているのは、この当時の状況を象徴的に示しているといつてよからう。

第六章は 1940 年で、1930 年代の締めくくりにはずだが、それにしてはいささか弱い。主として Mary McCarthy と Philip Rahv について述べられている。引き続いて epilogue となるわけであるが、1945 年と題される最終章も、1940 年と 1945 年の情況の相違が指摘されているにせまり、その相違がいかなる意味をもつのかは問われていない。問題提起として受けとれないこともないが、それでもなお、その対象は読者であるのか、著者自身なのかという疑問が残る。ただ、この epilogue で注目されるのは、1940 年において depression was over (p. 165) という感を抱かせるにいたった工業技術力の発展に対して、それを古い社会の終焉と感ずても、新しい社会の出発とはみない態度である。この観方には異論もあろうが、一つの時代観として面白いと思う。

以上にみてきたように、本書は時代を追って、各時代における人間観、社会観を述べているものであるが、両者のバランスがうまく

とれているとはいいい難い。ある時は人間を、ある時は社会を重点的に描いている。それでいいのだと思う。ただ、すぐれた批評眼を持っている著者のことであるから、読者としては、もう少し全体にわたって、問題を自分にひきつけて考える態度が欲しいと思う。この点では、前の方で触れておいた Van Wyck Brooks の、*Days of the Phoenix* に一步を譲るといわねばならない。著者は Starting out in the Thirties というが、われわれは and going to where? と問いたいのである。その行きつくところはどこなのか。やがて答がきけることを期待したい。

本書は 200 頁たらずの小さな本であるが、中に含まれる問題は大きい。少しでも 1930 年代に興味を持たれる方は、一読されれば、何かしらうところがあると思う。

Alfred Kazin: *Starting Out in the Thirties*, Atlantic-Little, Brown 1965